

逆接を表すテ形接続

——複合辞的な形式「ておいて」「(に) 見えて」
「てなお」——

江口 匠

[キーワード：①逆接 ②テ形（「て」） ③複合辞]

論文要旨

本稿では、逆接関係を表している場合の複合辞的な形式「ておいて」「(に) 見えて」「てなお」について考察した。「ておいて」は「て」と類似した構文（江口2016a）で現れ、「ておく」の有する「放置」のニュアンスから「て」よりも逆接と認識されやすい。「(に) 見えて」は逆接用法の「そうで」「ようで」と同じ構文（江口2016b）で現れ、それはモダリティ形式としての類似性に由来する。「てなお」は「なお」が文の必須要素として存在する場合に逆接と判断できる。逆接と認識される理由は「なお」が「依然として変わらない」という「不変化」の意味を持ち、「変化が生じるはず」なのに「変化が生じなかった」ことに、不自然さ・齟齬・矛盾を感じ、逆接として認識される。

1. はじめに

活用語のテ形¹⁾接続は節と節との間で多様な意味関係を表し得るが、逆接を表す場合については十分な分析がなされていない。それに関して、江口（2016a,b）で「て」「そうで」「ようで」については取り上げられているが、「ておいて」「(に) 見えて」「てなお」などの、複合辞的な接

続形式については分析がなされていない。そこで、本稿では上記3形式について実例を挙げながら考察していく。

2. 「逆接」と認識される文脈と理由について

まず、逆接について理解を共有しておきたい。逆接は自明の概念であるかのように扱われ、どのような文脈が逆接で、なぜ逆接と認識されるかが問われることは少ないように思える²⁾。しかし、テ形接続が表す意味関係が何なのかは文脈に依存するため、少なくとも本稿においては逆接がどのような概念なのか明確にしておくことは重要であろう。

学界における説の指標たり得る現行の辞書類では、そもそも「逆接」という術語は立項されていない場合が多い。その中で『日本語文法事典』では、「順接と逆接」(pp.296-298, 執筆:仁科明。以下、仁科(2014)と略記)という項目で説明がなされている³⁾。仁科(2014)によれば、逆接は「内容的対立を持った二事態の同時的並存」を前提としており、2つのタイプが想定される。これらは以下のようにまとめられる。

表1：仁科(2014)における「逆接」の2タイプ

| | 定義 | 例文 |
|------|-----------------------------------|-----------------|
| Aタイプ | 両句の事態が単純に同時並存しており、内容的対立が読み込まれている。 | 兄は賢いが、弟は愚かだ。 |
| Bタイプ | 前句から推論される事態の否定として、後句が表す事態が存在している。 | 雨が降ったのに、遠足があった。 |

Aタイプは単純な同時並存である。一方、前句と後句との間で時間的先後があると考えられるにもかかわらず、Bタイプが「同時並存」の枠内で理解できるのは、前句から推論される事態と後句が表わす事態とが対立していると解釈できる点からだと述べられている。

ここで問題になるのが、Aタイプが「対比」ではなく「逆接」を表す根拠である。そもそも逆接は対比性を帯びており、テ形接続の表す意味

関係が文脈に依存する以上、この二者を峻別する必要がある。そこで、本稿では石黒（1999）を援用したい。

石黒（1999：20-21）は逆接と対比とを線引きする基準として、「推論過程の有無」が重要だと述べている。「推論過程」とは、前件事態から生起されるべき順当な帰結に関する段階的推論を指す。逆接はこのプロセスを経る一方、対比はこのプロセスを経ない。この思考プロセスを経ることで、後件の情報がより重要であるように感じられる「後件比重性」が生まれるという。例を示そう。

（1 a）学者の中には、いろいろの角度から、この判決を非難する者が多い。しかし、わたしは、大体において、この判決を支持する。

（1 b）学者の中には、いろいろの角度から、この判決を非難する者が多い。一方、わたしは、大体において、この判決を支持する。
（石黒1999：20の（13a）（13b）による。下線部は発表者による）

（1 a）下線部の事態から「それならば、わたしも非難する」という推論があり、それを「支持する」という対義的な行為を以て否定するという思考プロセスが窺える。（1 b）はそのような推論過程を伴っておらず、単なる二事態の対比である。

以上、先行研究を見てきた。仁科（2014）と石黒（1999）を踏まえた上で、逆接がどのように認識されるのかを、以下のように図示する。

表2：本稿における「逆接」

| | | | | |
|---------|-------|-------------|-------|-------|
| 前件事態 | → | 予期される 帰結 | ⇔ | 後件事態 |
| 帰結の成立要因 | 順当な推論 | | 並存の矛盾 | 実際の帰結 |

3. 逆接を表すテ形の先行研究

既に述べたことだが、逆接を表すテ形接続については研究がほとんど見られず、用例が示される程度であった。それに関して現代語の範囲で記述的に取り扱ったのが、江口(2016a,b)である。本稿はこれらの先行研究に続くものであり、総合して逆接を表すテ形接続の体系的な整理を目的とする。以下、先行研究について簡潔に記す。

江口(2016a)は逆接用法の「て」を意味的・構文的に分類している。①「XしてXしない[ふり/顔]をする」構文(Xは「知る」「見る」「聞く」)で表される<偽装>型、②「XしていてYする」構文(Xは「知る」「わかる」、Yは動作動詞)で表される<敢行>型、③「XしてYしない」「XしてYするのか」「XしてYする[「とは」「なんて」「のは」などの補文標識]Zである」(XYの述語に制限はなく、Zは「すごい」「ひどい」などの様々な評価語句が用いられる)の、否定および反語表現に類する3構文のいずれかで表される<意外性>型の3類5文型を提示した。「て」が逆接を表していると解釈するには、これらのいずれかである必要があると述べている。

また、「そうで」⁴⁾「ように」について分析した江口(2016b)では、①「X[そ/よ]うでnot Xである」あるいは「not X[そ/よ]うでXである」構文(Xに同じ述語が用いられ、打消表現がいずれかの節に用いられる)、②「X[そ/よ]うで[Xの対義語]」構文、③「X[そ/よ]うでYである」のような、前件と後件の述語同士に語義的関連性はないが、前件事態から予想される事態における述語Xの否定形(あるいは、その対義語)がYに用いられる構文、④「XするようでXされる」構文が挙げられている。これら4構文が明確に逆接だと捉える形態的指標としては、前件の述部が「～してて」になったり、「実は」「その実」「意外と」「案外」「なかなか」などの副詞的表現が後件に現れたりすることが挙げられる。

4. 「ておいて」の分析

始めに、なぜテ形の範疇から「ておいて」という形式を抜き出して分析するのかを述べる。その理由は2つある。

一つは、「ておいて」は基本的に「《意外性》型」（江口2016a）の構文3文型にしか表れないこと、もう一つは、「て」単独では逆接と判断されにくい（多少据わりが悪い）例も「ておいて」で表現されれば逆接の解釈を導きやすい（別の言い方をすれば、「ておいて」全てが「て」に自然に置き換えられるわけではない）ことである。実例を挙げる。

- (2) 思えば彼も人がわるい。私にさんざんしやべらせておいて自分のシーオリーを少しも云わないのだから。

(浜尾四郎『殺人鬼』)

- (3) 「何じゃ、どうしたのじゃ、人を裸にしておいて謝る奴があるか」

(田中貢太郎『轆轤首』)

- (4) 次郎は考えた。自分から言い出しておいてそれを取消するのは、自分の立場はとにかくとして、留任運動そのものに水をさすようなものであった。

(下村湖人『次郎物語 04 第四部』)

- (5) この中で、今もって私の腑に落ちないことが、一つある。自分で翻譯しておいて腑に落ちないとは失礼な話であるが、元々学がないところへ辞書をテイネイにひくのがキライという不精な天性があって、ママならないのである。

(坂口安吾『安吾巷談 11 教祖展覧会』)

どの例も「ておいて」を「て」と置き換えることは可能だが、「ておいて」の方が逆接と認識されやすいと思われる。とはいえ、まだ「てお

いて」と「て」の差異は分明ではない。そこで、次に「ておいて」を「て」に置き換えにくい用例を挙げる。

- (6a) そうすれば部下も反抗心を起して、何だ雀の涙ほどの小遣いしか出さないでおいて、そんなに働いて堪るものかという気になって、自然横着をきめざるを得ないのであります。

(相馬愛蔵『私の小売商道』)

- (6b) ??そうすれば部下も反抗心を起して、何だ雀の涙ほどの小遣いしか出さないで、そんなに働いて堪るものかという気になって、自然横着をきめざるを得ないのであります。

((6a) の「ておいて」を「て」に改変)

- (7a) 「だってフラれたのは、わたしなのよ!? ひとをフツといて、勝手に落ちこむなんて、ずいぶんノブって調子いいよね」
(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 青山えりか

『好きから始まる冬物語』)

- (7b) ??「だってフラれたのは、わたしなのよ!? ひとをフツて、勝手に落ちこむなんて、ずいぶんノブって調子いいよね」

((7a) の「ておいて」を「て」に改変)

- (8a) 片山は、公園に向かって歩きながら、ブツブツ文句を言っていた。

「一緒に来といて何を言ってるのよ」

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 赤川次郎

『三毛猫ホームズのクリスマス』)

- (8b) ??片山は、公園に向かって歩きながら、ブツブツ文句を言っていた。

「一緒に来て何を言ってるのよ」

((8a) の「ておいて」を「て」に改変)

- (9a) 「お前さんのような道理の分らない人間は猫や犬を見たよう

なものだ。何だ教育があるの何のといって、人の娘を玩弄に
しておいて教育が聴いて呆れらあ。……へんッお前さんなん
 ぞのような田舎者に江戸ッ児が馬鹿にされてたまるものか」
 (近松秋江『うつり香』)

(9b) ?? 「お前さんのような道理の分らない人間は猫や犬を見た
 ようなものだ。何だ教育があるの何のといって、人の娘を玩
弄にして教育が聴いて呆れらあ。……へんッお前さんなんぞ
 のような田舎者に江戸ッ児が馬鹿にされてたまるものか」
 ((9a) の「ておいて」を「て」に改変)

上記のように、「ておいて」は逆接の意味関係をより強く表示するといえる。その原因としては無論、「ておく」が何らかの作用を及ぼしていると考えられるが、なぜ、「ておいて」は「て」と同じテ形であるにもかかわらず、逆接の意味関係を読み取りやすいのだろうか。それは、「ておく」が「放置」のニュアンスを伴うからである。

例に即して説明すると、(7a)～(9a)の前件行為は動作が完了してから、ある程度時間が経過していると考えられる。すると、行為の受け手は「自分の行動を改める(考えを変える)機会が何度もあったはずなのに、時間が大分経過してから今更になって宗旨替えするのか(普通ならしないだろう)」と考えるわけである。

つまり、「て」は基本的に継起関係を表すため、前件事態から後件事態が生起するまでの間隔が短い、「ておいて」は「ておく」に含意される放置の意味が表す時間間隔の長さのために、逆接の認識を容易にしているのである。(8b)の逸脱性が高いのは、前件事態が生じてすぐに後件事態が生起するのは不自然だからである((8b)のように、「一緒に来る」→「即座に文句を言う」という展開は一般に想定しにくい)。

5. 「(に) 見えて」の分析

「(に) 見えて」とは「に見えて」「そうに見えて」「ように見えて」「[こ
う／ああ] 見えて」の4形式である。なお、本稿における「(に) 見えて」
はモダリティ形式に相当し、実質的な述語は前接する要素である。例は
以下の通りである。

(10a) あのテストはやさしく見えて、そうでない問題が紛れている。

(10b) 小母様。私は強がりにみえて、本当はとっても弱いよね。私
は、彼を責める気はありません。

(久坂葉子『幾度目かの最期』)

(10c) 彼は幼稚に見えて実は、社会人らしい。信じられない。

(11a) 彼は酒が呑めそうに見えて、ほとんど呑めない。

(11b) 先生は温和そうに見えて、気性が激しい。

(11c) 上部はいかにも優しそうに見えて、実際は極めて意地の強く
でき上がった彼が、こんな弱い音を出すのは、ほとんど例のない
事だったからである。

(夏目漱石『彼岸過迄』)

(12a) すきだらけのように見えて案外すきがなく、大きくふりおろ
す太刀先には…… (後略)

(下村湖人『次郎物語 04 第四部』)

(12b) 「有ると見て、なきは常なり水の月」で、因縁によってでき
ているものは、皆ことごとく水上の月だ。あるように見えて、
実はないのじゃとって、今までは一切を否定してきたので
す。

(高神覚昇『般若心経講義』)

(12c) 彼は日頃ぼんやりしているように見えて、職場では澁刺とし
て働いている。

例(10)～(12)の「(に)見えて」は、あるべき語形変化がなされれば「そうで」「ように」に置き換えられ、江口(2016b)で述べられた「そうで」「ように」の構文体系に類するようである。上記の(10)～(12)におけるabcは「X(そう/よう)に見えてXでない」「X(そう/よう)に見えて【対義語X】」「X(そう/よう)に見えてYである」の順に並んでいる。これは、「そうで」「ように」の構文体系とほとんど合致している。

ただし、「に見えて」は実質語であるにもかかわらず、単体で一つのモダリティ形式とも解釈できる点と、前接する述語に制限があるという特徴が見られる。「に見えて」に前接できると考えられるのは、形容詞連用形、形容動詞語幹+「らしく」(「柔和らしく」など)、形容詞語幹+「がり」(「強がり」など)、形容動詞語幹、動詞+「たがり」(「自慢したがり」など)の5種類⁵⁾であろう。

そのような述語の共起制限を解消するために用いられるのが、「そうに見えて」「ように見えて」という表現形式である。また(10b)のような「に見えて」は、「強がりのように見えて」のように属格「の」を介せば単純に置き換えられるが、「そうに見えて」へ置き換える際、動詞をテイル形にしなければならない。つまり、(10b)は「強がりにみえて」⇒「強がっていそうに見えて」としなければ非文になってしまう。形容詞はテイル形をとれないため、語形変化の必要がない。

一方、それらの体系と異なるのが「[こう/ああ]見えて」である。これは「そうで」「ように」と機械的に置き換えるのは不可能である。「そうで」「ように」は機能語であって単体で用いることができないため、置き換えが不可能なのである。以下に例を掲げる。

(13) こう見えて、かれはなかなか神経がふとなのだ。

(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』辻真先

『寝台超特急ひかり殺人事件』)

(14) ああ見えて、強いんだよね、潤子。頑固なんだ。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 馳星周『虚の王』)

これらは(10)～(12)の「(に)見えて」と区別されるべきだが、逆接の意味関係で接続するテ形接続の一つなので、本稿では同じ章で扱うことにする。

この構文の前件においては、実質的に述語を担う部分が「こう」「ああ」という指示語で表現されているため、語用論的な分析をしなければ構文体系を示せない。とはいえ、後件述語から推測することはできる。例えば(13)ならば、「彼」は「神経がふとく」(人の言うことなどを気にしない)は見えないことが推察される。同じように(14)では「潤子」は「頑固」ではなさそうな性格で、精神的に「強く」もなさそうであることは直観的に感じ取れる。前文脈や話者の知識には、後件述語から窺える性質と相反する印象が描かれているのである。また、「見える」のは現場指示的な外見、あるいは観念指示的な印象のことなので、必然的に後件述語は状態・属性を表す表現(典型的には形容詞・形容動詞)である場合が多い。動作的な表現も現れるが、それは文脈的に動作主の性質を物語るための文である。

例えば、「彼はああ見えてよく自炊をするんだよ」という例文で、話者は「彼」が「穴場のレストランの場所をたくさん知っている」ということを知っている、と仮定しよう。そのような場合、話者は「彼」が「外食ばかりしている」と思い込む可能性は低くない。しかし、実際の「彼」は「よく自炊をする」ような生活をしている状態であると分かると、自分の前提知識と実際の状態とで矛盾が生じ、逆接と認識するのである。

6. 「てなお」の分析

本稿において、「て」と「なお」とで分けるのではなく「てなお」として扱うのは、一部の用例では「て」と「なお」が不可分の関係で接続していると考えられるからである。例えば、「祖父は老いてなお盛んで

ある」「彼は親を亡くしてなお気丈にふるまう」という例文ならば、「なお」を取り除き「て」単独にすると逆接と解釈できず、文としての許容度にも疑問が残る（*「祖父は老いて盛んである」*「彼は親を亡くして気丈にふるまう」）。また、複文を2つの単文にしても据わりの悪さは依然として残り（*「祖父は老いた。なお盛んである」*「彼は親を亡くした。なお気丈にふるまう」）、それを解消するには「しかし」「それでも」などの、いわゆる逆接の接続詞を伴わなければならない（「祖父は老いた。しかし、（今も）なお盛んである」「彼は親を亡くした。それでもなお気丈にふるまう」）。

翻って、「祖父は老いてなお盛んである」「彼は親を亡くしてなお気丈にふるまう」は「てなお」の形で逆接関係を表すことができ、なおかつ逆接の接続詞や助詞「も」を伴わなくてよい。以上の理由により、「なお」を後件に現れた副詞としてではなく接続形式の一要素として捉え、「てなお」を一つの複合辞だと仮定して考察を進める。

形式だけで機械的に判断すれば「てなお」は逆接だけではなく、大きく2種類の用法がある。一つは、「～して、さらによりいっそう」の意味であり、これは逆接ではないどころか、「てなお」ではなく「て」と「なお」である。下記の(15)のような例である。

- (15a) 見ればこのまま帰ってしまっても義務だけは果したのだと思うと、そのまま黙ってなお一層視線を千鶴子の方へ強めてみた。水色のソアレに銀色の沓で千鶴子はピエールに腕をよせ、巻きこむような欄干の軽快な唐草の中を静かに笑みを泛べながら降りていった。

（横光利一『旅愁』）

- (15b) そして皆が大声をあげてなお詳しく語り続けようとした時、急に選手の一人が誰れか艇庫の戸口に立聞きしている人を見出して小声で注意した。

(久米正雄『競漕』)

このような例は、統語的には「て」で叙述が一度切れ、「なお」は後件述語に係る副詞となる。(15a) ならば、「そのまま黙る」が前件であり、「なお一層視線を千鶴子の方へ強めてみた」が後件である。(15b) ならば、前件「大声をあげる」、後件「なお詳しく語り続けようとする」である。「てなお」と「て、「なお」を峻別する基準としては、前件事態と後件事態の展開が不自然だったり、二事態の関係性に矛盾があったりすれば「てなお」、順当な展開だったり、前件述語が後件述語の様態(「～したまま」と言い換えられる場合)であれば後者である。本稿では「て、「なお」は取り扱わない。

逆接用法の例は、下記に挙げる(16)が挙げられる。これらは、意味的に「～して、それでも」と言い換えられる。その逆接関係の本質は、「能力的・感情的・数量的程度の幅」についてマイナス方向に影響を及ぼす行為が前件で表現され、そのような消費・消耗・衰えに類する事態が上手く機能しなかったことにある。

(16a) 塩野の叔父は意志の強そうな、やや金窪眼の老人とはいえ、声には張りが籠ってきんきんとよく響き、何より実行力の溢れたその确实そうな風貌には、世の荒波を押し渡って来てなお衰えぬ厚みがあった。

(横光利一『旅愁』)

(16b) (前略) ところが利子も払い元金も返してなお利益のある仕事というものはきわめて少ない。

(相馬愛蔵『一商人として 所信と体験』)

(16c) 深夜、人去り、草木眠っている中に、ただ暗中に端座して鉄槌を振っている了海の姿が、墨のごとき闇にあってなお、実之助の心眼に、ありありとして映ってきた。

(菊池寛『恩讐の彼方に』)

- (16d) 起工後足掛け三年目の明治三十五年の七月に、七十万ドルの予算をすっかり使い果してなお工事の見込みが立たぬいいわけめいて、(後略)

(織田作之助『わが町』)

- (16e) 現在中村屋では毎日八、九千人のお客を迎え、販売部に製造部に喫茶部に二百七十人のものが懸命に働きつづけてなお手まわりかねる有様であって、(後略)

(相馬愛蔵『一商人として 所信と体験』)

- (16f) だが一枚の絵でさえも調子を合せるに一〇日もかかることがあるし、構図の安定に幾日間を費やしてなおまとまらないのだから、この極楽世界の混乱をパンやゴムで消して見ても、何時仕上がるか見当がつかないかも知れない。

(小出楯重『油絵新技法』)

上記の(16)は全て、前件では程度の幅がある状態・属性・動きについて語る文脈であり、その結果考えられる帰結に反して、ほとんど影響を受けていないことが後件で示されている。なぜ、「てなお」では基本的にこのような文脈が現れるのか。それは「なお」が「依然として変わらない」というニュアンスを含意するからである。「変わらない」ことを明確に示すには、程度に「幅(段階・レベル)」がある必要がある。そして、「通例ならば変化が生じる」はずなのに、「変化が生じなかった」ことに対して、不自然さ・齟齬・矛盾を感じ、逆接として認識されるのである。そのため、一回的事象を表す事態や消費・消耗を伴わない事態は、基本的に前件では現れない。

7. おわりに

以上、逆接とは何なのかについて一定の定義を示した上で、江口

(2016a,b) との有機的関連を意識しながら「ておいて」「(に) 見えて」「てなお」について考察・分析を試みた。簡便ではあるが、以下の表に本稿における記述の結論をまとめる。

表3：逆接を表す複合辞的なテ形接続の概観

| | | 前件の形態的特徴 | 逆接と解釈される理由 |
|------------|-------------|---------------------------------|---------------|
| ておいて | | ≪意外性≫型の 3構文 (江口2016a) | 「ておく」の「放置」の意味 |
| (に) 見えて | 見えて | 形容詞連用形、 形容動詞語幹+「らしく」 | 「比況」「様態」の意味 |
| | に見えて | 動詞+「たがり」、形容動詞語幹、 形容詞語幹+「がり」、 | |
| | そうに見えて | 様々な述語用言 | |
| | ように見えて | | |
| | [こう/ああ] 見えて | | |
| てなお | | 様々な述語用言 | 「なお」の「不変化」の意味 |

テ形に限らない現代語の逆接表現の体系的整理、古代語における逆接の諸相、現代語と古代語との対照などが課題として残っている。今後、さらなる展開を試みたいと思う。

注

- 1) 本稿執筆者の想定するテ形とは、接続助詞「て」、指定辞「で」、複合辞的な「て」である。
- 2) ガ・ケレド・ノニ・テモなど、代表的な接続表現はほとんど形式だけで逆接と判断できる（ように見える）ことも原因だと考えられる。
- 3) 本稿においては、特に川端（1958）を踏まえた記述に注目している。参照されたい。
- 4) この「そうで」は「連用形+そうで」を指し、「終止形+そうで」ではない。
- 5) 形容詞連用形および形容動詞語幹+「らしく」は「に」が付かない。

【用例出典】

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（検索アプリケーション：「少納言」）

『青空文庫全』（検索アプリケーション：「日本語用例検索」）

【参考文献】

石黒 圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198

江口 匠（2016a）「＜逆接＞を表す「て」をめぐって」『人文』14

江口 匠（2016b）「逆接の意味関係で接続する「そうで」「ように」
『学習院大学大学院日本語日本文学』12

川端善明（1958）「接続と修飾：「連用」についての序説」『国語国文』
27-5

仁科 明（2014）「順接と逆接」日本語文法学会（編）『日本語文法事
典』（大修館書店）

【付記】

本稿は、日本語学会2016年度春季大会（於：学習院大学）における口頭発表の内容に基づく。発表の席上、および発表後の個人的なやり取りにおいて、多くの方々からご助言を賜ることができた。ここに記して御礼申し上げる。ご助言を十全に反映できていないであろう点も多いが、言うまでもなく全て本稿執筆者の不徳の致すところである。

Te-form of compound particle as contradictory conjunction

Eguchi, Takumi

This paper presents an analysis of expression of the Japanese language “teoite”, “nimiete” and “tenao” as contradictory conjunction. “Teoite” appears in a syntactic environment similar to “te”, and it is more likely to be recognized as a contradictory conjunction, because of “teoku” which means sustaining. “Nimiete” is used in the same syntax of “soude” and “youde” as contradictory conjunction, since they have common meaning of modality. “Tenao” can be interpreted as contradictory conjunction if “nao” exists as an essential element of the sentence. The reason why it is judged as contradictory conjunction is that “nao” has the meaning “still unchanging”.

Key Words: te-form (“te”), Contradictory conjunction, compound particle

(平成28年度日本語日本文学専攻博士前期課程修了)